恵泉樹の文化史（1）

アジサイ

宮内 泰之(園芸短期大学)

アジサイといえば、梅雨の時期に花を咲かせる代表的な樹木である。梅雨の時期には伊勢原キャンパスでもあちこちで花を咲かせている。ところで、このアジサイの種子を見たことがある方はどれほどいるだろうか。おそらくほとんどの方は見たことがないと思う。というのも、園芸品種のアジサイはほとんど種子をつくらないので、見たくてもまず見ることができないのである。ただし、この書き方では誤解を招くので、もう少し詳しく述べることにする。

庭先でよく見かける園芸品種のアジサイの花（正確には小さな花がたくさん集まって一つの大きな花序をつくっている）は、大きく分けると２つのタイプに分けられる。１つは花序全体が目立つ花びら（正確には萼片）を持つ花（装飾花）によって構成されている、いわゆるアジサイとよばれているタイプ。もう１つは装飾花が花序を縁取り、中心に小さく目立たない花（両性花）が集まっているガクアジサイと呼ばれているタイプである。装飾花は萼片が大きく発達する一方、雄しべと雌しべは退化してしまっている。では、なぜこのように装飾花と両性花の両方があるのだろうか。それは、目立つ装飾花によってチョウやハチなどの虫を呼び寄せて両性花の受粉を促している、と説明されている。手毬のような花序をつけるアジサイはガクアジサイの花序全体が装飾花に変化したものなので、虫が寄ってきても受粉する術もなく、種子をつけることはあまりない。そのため、アジサイの増殖には一般的に挿し木が行われている。

園芸品種のアジサイはさておき、野生のアジサイの仲間をもう少し詳しく見てみることにする。上述のガクアジサイはもともと本州の太平洋岸等に自

生する野生植物である。神奈川県内でも、三浦半島、江ノ島、小田原、真鶴半島などの海岸にみられる。その他、神奈川県内では以下のアジサイの仲間が見られる。まずは、ツルアジサイ。丹沢や箱根など少し涼しい山中でみられる。名前の通りつる性の植物なので、花の時期には白い装飾花が樹幹を転々と登っており、涼しげな雰囲気をかもし出している。ただし、近縁のイワガラミという植物とそっくりなので注意が必要である。次にコアジサイ。箱根、丹沢一帯の樹林内に普通にみられる。名前の通り全体にやや小さめの植物である。装飾花がなく両性花ばかりで、素朴でさわやかな花を咲かせている。花の時期に山を登っているとちょうど視線の先にこの花があり、疲れを癒してくれる。次にヤマアジサイ。県内では丘陵地や山地の林縁、樹林内に普通に生えている。ガクアジサイのように装飾花が花序を縁取っている。ガクアジサイとともに園芸品種のアジサイの交配に利用されている。そしてタマアジサイ（図 18)。県内ではほぼ全域の樹林内、特に谷沿いでよくみられる植物である。花の時期は他のアジサイよりも少し遅れて、真夏である。花よりも名前の由来となった玉のようなつぼみがユニークなアジサイである。他のアジサイが花を咲かせている時期に見られるニョキッとつき出たまん丸のつぼみは、一度見ると忘れることはないだろう。

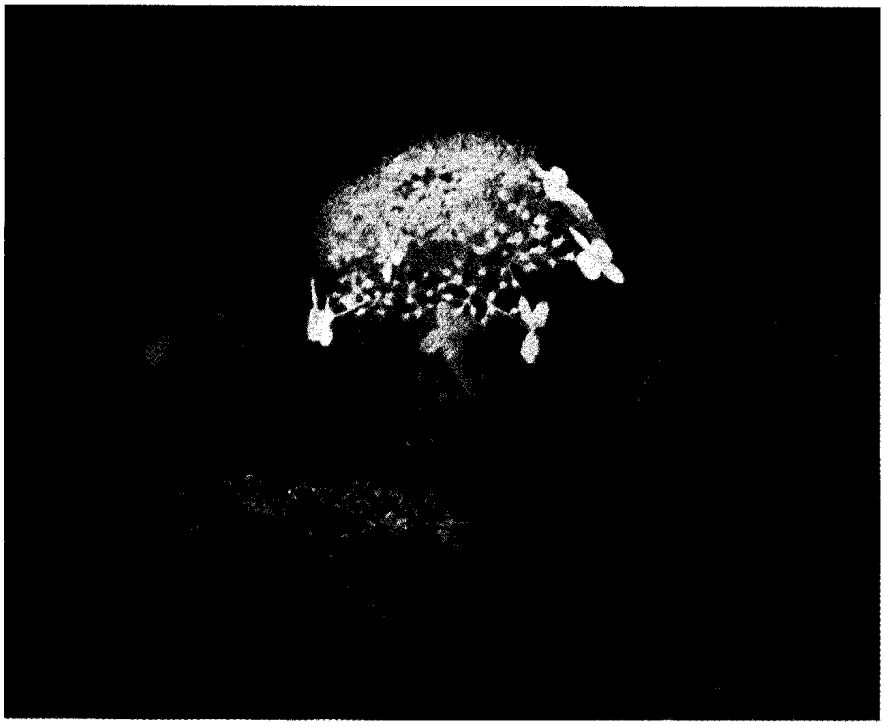

図 18　タマアジサイの花

以上のほかにもいくつかアジサイの仲間はあるが、今回はこのタマアジサイに注目してみたい。

タマアジサイは伊勢原キャンパスの周りでも、三段の滝へ向かう沢沿いの道や、谷戸などでたくさん見ることができる。キャンパス周辺に限らず、谷戸の植物といえばタマアジサイをまず思いつくほど、私にとってタマアジサイは谷戸という地形に深く結びついた植物である。初めてタマアジサイと認識したのは高尾の山中であったが、谷戸とのつながりを強く意識したのは鎌倉でこの植物を見た時のことである。鎌倉でアジサイといえば、やはり「あじさい寺」、つまり山之内の明月院が有名である。6月の休日と梅雨の晴れ間が重なった日には、北鎌倉駅から長蛇の列ができる。約3,000株とも言われるアジサイが、ところ狭しと植えられている。種類も豊富でアジサイ、ガクアジサイ、ヤハズアジサイ、カシワバアジサイ、シチダンカなどさまざまなアジサイを見ることができる。花の色は青系統で統一されているとのことである。しかし、明月院にタマアジサイはあっただろうか。おそらく、境内のどこかには生えていたかもしれないが、華やかな園芸品種のアジサイに気を取られ、タマアジサイの記憶はまったくない。

同じ鎌倉でアジサイの穴場として二階堂の瑞泉寺がある。駅からやや離れていることもあり、アジサイの花の時期でも境内を落ち着いて見て歩くことができる。参道の階段を上っていくとまず気付くのが、湿った岩肌を背景にしたタマアジサイとその丸いつぼみである。寺の人が植えたのか、自然に生えているのか、自然に生えていたものを守り残しているのか、いずれにせよ周りの雰囲気に溶け込んでおり、ここが谷戸であることをあらためて気づかされる瞬間である。元来、名園と呼ばれる庭というものは、その場所の地の利を巧みに生かしているものである。京都に名園が多い理由の一つとして、その地形、地質ゆえに湧水や庭石そして眺望に恵まれていたためであるといわれている。同様に、鎌倉の庭が京都のそれとは違った良い味を出しているのは、露出した岩壁（そこに刻まれた「やぐら」も含めて）と地層の境目から出る湧水と言えるであろう。湧水の染み出すラインに沿って自然に生えるイワタバコやコモチシダなどの植物はタマアジサイと同様、鎌倉の谷戸に位置する庭であることを主張するかのようである。瑞泉寺の境内には、もちろんタマアジサイだけでなく、園芸品種のアジサイも植えられている。しかし、

瑞泉寺では昔からそこに生えているタマアジサイを変わらずに大切に扱っているように思われる。一方、明月院でアジサイが植えられるようになったのは、戦後のことだそうである。最近では境内にイングリッシュガーデンも造られ、ますます多くの人が訪れる庭となっている。

京都造形芸術大学の尼崎博正先生は『風景をつくる』という著書の中で、「不易」と「流行」を見極めるという視点から、日本庭園の自然観を検証している。「不易」と「流行」。「恵泉樹の文化史」ではこの言葉をテーマとして様々な樹木を見ていくことにしたい。昔からあるタマアジサイという植物を大切にし、愛でる気持ち。その一方で、園芸という分野の進歩発展のためにアジサイの様々な園芸品種を作出していく立場。もちろん、どちらが正しいということではない。しかし、物が溢れる現代、園芸までも新しい物、珍しいものを追いかけることに終始しているのが現実である。園芸文化を語るからには、昔から変わらずにある植物、そしてその植物を愛でる気持ちを大切にしていくという部分についても、十分検討していく必要があることは言うまでもない。

最後に、冒頭にふれたアジサイの種子について。タマアジサイの種子は長さ 1mm 以下の粉のように小さいものである。4 年程前に伊勢原市の日向地区で採取したタマアジサイの種子を播いたところ、発芽率は非常に良く、順調に生育し、去年初めて花をつけた。野生の植物なので、キャンパス内に咲いているのを見ても違和感はある。しかし、タマアジサイのその素朴な彩りをぜひ鑑賞してもらいたい。

参考文献

青木登. 神奈川庭園散歩. のんぶる社. 1996.

太田和夫他. 樹に咲く花. 離弁花２. 山と渓谷社. 2000.

大場秀章他. アジサイの仲間特集. 新花卉 109 号. タキイ種苗. 1981.

神奈川県植物誌調査会. 神奈川県植物誌 2001. 神奈川県立生命の星・地球博物館. 2001.

佐竹義輔他編. 日本の野生植物. 木本Ⅰ. 平凡社. 1989.

武田幸作. アジサイはなぜ七色に変わるのか？. PHP 研究所. 1996.
中村一・尼崎博正. 風景をつくる. 昭和堂. 2001.
平塚市博物館. 湘南植物誌Ⅴ. 平塚市博物館. 2000.
山本武臣. アジサイ. グリーンブックス 53. ニューサイエンス社. 1979.
山本武臣. アジサイの仲間. 趣味の園芸. ＮＨＫ出版. 1981.
山本武臣. アジサイの話. 八坂書房. 1981.
山本武臣. アジサイの源流. ガクアジサイ. ガーデンライフ. 1986.
山本武臣. 日本アジサイ属園芸図鑑. 一関観光協会. 2000.
渡辺健二. 日本アジサイの魅力とその歴史. 園芸新知識. 花の号. 2004.